The Japan Society of Educational Sociology

識の主体も，専門家なのか一般の人なのか曖昧なのだ。たとえば，「教育における〈不平等〉問題は死角に追いやられたまま」だったというような記述があるが(94頁)，これは，マスコミはいざ知らず，教育社会学や階層研究についていえばまったく誤っている。さらにこれら専門家に向かって「『結果の平等』が実態として実現していない」(174頁) と説く必要はない。自明のことだ。しかし，それを示す研究として，「不平等が拡大した」と主張している橘木氏や佐藤俊樹氏のものを挙げるのは筋がずれている。

ほかにも，「努力＝平等主義が一つのイデオロギー」にすぎない (159頁) のはその通りなのだが――イデオロギーではない社会的言説などあるだろうか――それが「教育達成における階層差を作り出し」たなどというのは，あまりにも正確さを欠いた話になる。その上で，学校が平等化よりは不平等を再生産する装置だということが「研究の世界では定説」だ (117頁) と書かれているのをみて，驚いてしまった。どうも著者のように「不平等拡大」を唱える人たちには，教育機会が拡大したことで教育を媒介にした不平等の再生産が拡大したはずだという思いこみが強烈にあるようだ。それと同時に，戦後の「機会平等化」が幻想であった，不平等を隠すものであった，あるいはかえって不平等を拡大するものであったと，何とかして論じたくてしかたがないのだろう。けれど，これがもし「機会の平等化」を軽視するもので，現在起こっているかもしれない教育機会の経済格差の拡大に目をつぶるようなことになれば，それこそ「不平等拡大論」の意図せざる結果をもたらすだろう。

以上，評者からみればどうしても気になる点が目についてしまったのだが，むろん格差拡大は決して小さな問題などではない。本書がこれを多方面から吟味しているその努力はすなおに評価したい。そして，そのひたむきさが多くの読者の共感を呼ぶもととなっていることも強調しておきたい。

◆A5判　238頁　本体3,800円
有信堂　2001年7月刊

■ 書 評 ■

吉川　徹［著］

『学歴社会のローカル・トラック――地方からの大学進学――』

新潟大学　藤村　正司

高校生の大学進学行動に地域間格差があること，大都市や一部の地域を別にすれば，大学進学とは一般に経済的・心理的負担のかかる県外進学であり，それゆえ学力と家計の腕力勝負であることは今に始まったことでもなく，ことさら新しい社会現象でもない。

しかし，過疎に悩む自治体が，なぜ若者の流出を奨励するような多大な教育投資を行うのか。また，都会に流出した地

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

方出身の青年がいったいどのような経路をたどってなぜ故郷に舞い戻ってくる(こない)のか。こうしたローカルな問題は，これまで他人事として扱われてきたように思う。本書は，地方県が抱える若年エリート層の流出に，最後の戦後学歴社会の面影を見ようとするものである。臨床的な問いの立て方，データの収集と分析，問題の構造化，仮説の構成へと進行する本書から評者は学ぶところが多かった。

三部構成からなる本書。第一部では，上記課題の設定，調査の手順，フィールドの説明に当てられる。フィールドとなる自治体は，著者の出身地で過疎に悩む島根県。高校は，山間部という地理的条件から総合選抜制とは無縁の県立横田高校。親の学歴は一様に高卒・中卒レベルだが，希望者全入に近いこの普通科高校から旧帝大進学者もいるから驚く。学力向上の仕掛けは，島根方式——習熟度別クラス編成とベテラン教員の人事交流——にある。上層部と下層部を除いたこのフィールドの選定は，著者の前著『階層・教育と社会意識の形成』を引き継ぐものであり，再生産論の理論負荷に陥らない研究上の戦略ゆえである。

第二部では，大衆教育社会にエントリーされた若年エリート層たちの卒業後のライフヒストリーが地域移動のパターン別に描写される。この第二部のオーラル・ヒストリーが本書の最大の魅力である。写真が定点観測の役割を果たして6年間の変化を瞬時に語ってみせる。読者は，ルサンチマンを感じさせない青年たちの漂流に共感するであろう。

第三部では，パネル・データを用いた意識の移動表の分析により，移動パターン別に意識の変容が整理される。著者は，青年たちのなかに漂白されない高校卒業時の考え方を見いだすが，こうした堅実な意識をはぐくむ環境の圧力が，実は島根版「ローカル・トラック」から形成されたものだとみる。そして，人口の不可逆的な流出に悩む地方からの大学進学を説明するには，学校のランクにとらわれない「ローカル・トラック」に着目する必要があると同時に，若年エリート層の流出を制御する教育政策が重要だと提言する。

以上が本書の概略である。計量分析とフィールドワークを重ね合わせ，地方出身の「普通」の若者の漂流を丁寧に解きほぐした著者の腕前はなかなかである。ここでは，終章の「ローカル・トラック論」にかかわって素朴な印象を述べてみたい。

終章に書かれていることは，地方ガバナンスにとって人材リクルートがいかにあらねばならないかについてである。島根方式というのは，一点豪華主義ではなく，教育投資を分散させて，山間部の高校生を「ハマータウン化」させない勉学装置だと思う。この方式は評者の勤務地とは逆の方式だが，これによって県がねらっているのは，「身売り」(233頁)というよりも，ほどほどの学力を身につけさせて後は自由に泳がせることではないかと思う。

著者は過疎流出モデルの説明にかかわって，「現実的な問題としては，……地元県に留まることがどれほどたしかなステ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ップとなるかという点にかかってくる」(230頁) と指摘されている。その通りである。しかし，ほどほどの学力を有する層はつぶしが効くから，たしかなステップがあろうがなかろうが，いずれは地元に戻ってこよう。他方，「グローバル・トラック」に乗った高学力層は，およそ地元には戻らないと思う。この意味で著者のいう「ローカル・トラック」は，従来の学力をベースにしたアカデミックなトラッキングと大差ないように感じた。3年A組に見る山間部出身の，下降移動のリスクが小さいつぶしの利く層と，本書の分析から除かれた高学力・高リスク層は，不可逆的な人口流出の実態がある県とはいえ，異なる「トラック」を走っているように思う。

ところで，ロー・テクしかない過疎県でも，県庁，病院，学校，地方メインバンクなど地方の骨格部分となる職場はどこでも存在する。評者というか，地方国立大学に勤務する者が知りたいと思うのは，そうした骨格となる職場にどの大学からどの程度リクルートされているのか，ということである。「島根県という地域システムは，……県内エリートの総数を増やすことにたいへん意欲的である」(219頁) とあるが，例えば島根県庁，島根銀行，教員にはどのくらいJターン組が採用されているのだろうか。地元国立大学がそうした職場に人材を輩出したいと願っているが，古池建亮の事例が実態であれば，地方国立大学の地盤沈下は否めないし，もっと頑張らないといけないと感じた。

時論として本書は，国立大学の統合再編問題にかかわってくる。たまたまかもしれないが，3年A組の事例は文系の学部進学者が多い。県内周流型のメインストリームとなる島根大学に工学部がなかったことが，島根県の若年エリート層の県外流出に拍車をかけてきたのではないかと思う。工学部もさることながら，教員養成系学部の広域的な再編は，地域の歴史や文化を知る若年エリート層の県外流出につながるだけに地域への波紋は大きい。

以上の感想は，3年A組の卒業生を貶めるものではない。評者は，島根県の復古神話でも最後の戦後学歴社会の面影でもなく，地方県が構造的に抱える若年エリート層の流出を，当事者の立場から描いた本書から多くの刺激を受けた。本書を契機に，地方からの大学進学をめぐって複数のモノグラフが描かれることを期待したい。

◆四六判　248頁　本体2,000円
世界思想社　2001年9月刊

NII-Electronic Library Service